

## 第 89 回アーバントリップに参加して



静岡地域会  
鳥居久保

2019年3月7日、関東甲信越支部のアーバントリップ主催の施設見学会が「富士山麓に建つ建築を訪ねて」のテーマのもとに開催された。今回はアーバントリップ委員会より地元の静岡地域会に参加の依頼があり、静岡からは6人がツアーに加わり合同の見学会となった。

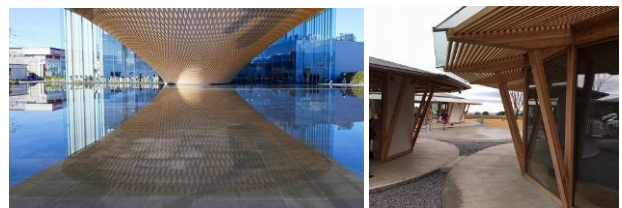
関東甲信越支部の45人を乗せたバスが「富士山遺産センター」に到着したのは11時半過ぎ、予定より30分遅れの合流となった。小雨がぱらつく肌寒い天候の中で一行は敷地南の駐車場でバスを降りて、ほとんどの見学者がたどるルートを赤い鳥居と遺産センターを視界に入れながらアプローチした。木の格子を纏う逆さ富士とそれを映す40ミリの水盤を大きく迂回しながら、エントランスに向かう。この視点の移動の際に水盤に映り込む虚像としての「正富士」のフォルムこそ、坂茂氏が目指すモニュメンタリティであり、水に映る壮大な映像の中に真のファサードを見る。だから、この後入館する実体としての博物館展示や最上階の展望ホールは、ファサードから切り離された機能部分と捉えられる。つまりファサードと機能が分離されて別々に存在するという特異なユニークさがここにある。

この後、昼食を挟んで富士市大淵にある手塚貴晴、手塚由比氏による「むく保育園」に向かった。ここは「富士山フロント工業団地」の一角にある事業所内保育園である。団地内には大規模な工場や生産施設、ストックヤードなどが並ぶ。そんな工場の敷地の奥に、ふっと姿を現すのが「むく保育園」である。そこでは大小の傘の屋根がいくつも開き、それらが波紋のように干渉し重なる。軸組を構成している木（もく）の柱とそこから斜めに突き出た方杖が、各棟の透明ガラス越しにリズムを作る。これは建築というより傘の下に落とされた光の陰影とその濃淡によって作られた場の現出である。保育室、多目的室、調理室、事務室等々、それぞれに違う機能と広さと高さを持ち、軒が上下にラップしながら12の室（棟）が次々に連続していく。園児たちはその丸い外形に合わせて室の間を駆け巡る。この保育園は子供たちにとっては「遊び」に等価の外部なんだろうと思う。

次に行ったのが長泉町のクレマチスの丘にあるヴァンジ彫刻庭園美術館とベルナール・ビュッフェ美術館であった。この二つの美術館はスルガ銀行が施主となってそれぞれ、1973年と2002年に竣工した建築である。

このビュッフェ美術館は菊竹事務所の作品であるがこの日は当時の担当者であられた阿波秀貢氏に設計秘話を聞かせて頂いた。入所1年目でビュッフェ美術館の設計に関わるように言われ意気込んで取り組んだが、思うように進まず苦戦していた時、阿波氏がスケッチしていた△（三角）の展示室パターンが菊竹氏の目に留まりそれがプランの原型になったことや、その正三角形の原型に菊竹氏が手を入れて崩したことをずっと気にされて、たとえ一年目の新人に対してもオリジナルな発想には常に敬意を払われる菊竹氏の凄さを語られた。またヴァンジ彫刻庭園美術館では時折雷が降るほどの悪天候の中で、設計者の宗本順三氏は順路に従って建築と彫刻について丁寧に解説された。建築は小賢しい装飾を一切身に着けない。そこには相当厳しい予算の縛りがあったと述懐する。しかし打放しのニュートラルさは間違いなく彫刻の持つ内面を表出させる。近景から中景、そして遠景へと視点の誘導が実に巧妙に仕掛けられ、冷たい雨も横殴りの風も広大な敷地を駆け抜け、その大いなるコントラストの中に鑑賞者は投げられる。彫刻と建築と自然との対比は美しく、時に厳しくそれこそが宗本氏の創作である。

建築を鑑賞する条件としてはこの日、必ずしも恵まれてはいなかったが建築の持つ普遍さや相対さを改めて考えさせられた味わい深いアーバントリップであった。特に誘って頂いた委員長の尾形氏には心から感謝申し上げて、今後の交流の継続を約束しながら降り続く雨の中、帰路に就くバスを見送った。



富士山遺産センターの水盤に映り込む「正富士」 干渉して重なる屋根（むく保育園）